

インターネットに何を見るか。

私たちは技術と社会が深く結びついた時代に生きている。

これまでの経済成長を通じ、私たちは技術の進歩が以前の生活、制度や経済活動に影響を与え、社会を大きく変えていく様子を見てきた。また逆に、社会のニーズが市場を通じて技術にフィードバックし、新しい技術展開を促していくことも知っている。

こうした時代に、人々や組織のあり方に最も大きな影響を与える立場にあるのが広い意味でのメディアであり、それを支えるメディア技術である。そして今、この領域で根幹を揺るがす一大変化が起こっている。

それは、身近にはLPレコードからCDへの移行であり、ワープロや電子手帳、パソコンといったデジタル機器のオフィスへの浸透である。また、気づかないままその恩恵を受けているコンビニ店頭のPOS、予約やバンキングシステムの普及である。そして最近話題の「マルチメディア」も、「インターネット」も、これらの流れの中に含まれる。こうした技術的史観からの大きな流れ、それはアナログからデジタルへのパラダイムシフトとでも呼ぶべきものだ。

これまでヒトは素材を選び、その性質を活かすように道具としてのメディアを作ってきた。たとえば原稿用紙。インクを気持ちよく吸い取るよう選別された紙質、ひたすら文字が書き込まれるのを待ちかまえるようにデザインされた昇目。そこには、素材が醸し出すハーモニー、ヒトと道具の美学とでも呼べる



関係がある。

このように優れた道具を生み出してきた私たちの文化は、メディアの開発においても同じような高みを目指して進んできた。しかし、映画がフィルムロールを媒体としているが故の限界を持っているように、アナログ技術をベースにしたメディアはそれぞれが担わされた機能の限界を持っている。

これに対してデジタル技術は、私たちと道具の間に根源的な枠組みの転換を促している。その根底にあるのはバイナリーな世界観である。そこでは、アナログ機器では表現形式に同梱してしか渡せなかった情報が、まったく独立したものとして取り扱われる。そればかりか、その表現形式すらもデジタル情報として流通させることができる。このように、デジタル機器は媒体と表現を分かちことによって、アナログ機器の持つさまざまな制約を超越し、メディアの可能性を大きく広げようとしている。

こうしたデジタル原理を最も忠実に実現しているのがコンピュータである。多様な表現を統一して扱う技術として注目されているマルチメディアも、基本的にはコンピュータが持っている資質の一つに過ぎない。そういう意味では、マルチメディアは、これまで個々のアナログ機器に依存する形で展開してきた多くのメディア表現を、コンピュータが作り出すデジタル環境で再統合し、新たなコミュニケーション世界を構築する“きっかけ”とみることができる。

このように、マルチメディアが「表現の再統合」という方向を示していると

すれば、インターネットは表現の領域をも含む「関係の再統合」という方向を示しているのではないだろうか。

これまで人間の作ってきた組織の、最も一般的な形は「ツリー構造」だった。軍隊や企業に見られるように、ツリー構造は合目的な組織行動を实践する上では最も効率的な形態とされてきた。だがこの中では、あらかじめ「個」の役割は規定され、多様性は抹殺されてしまう。異なる視点の情報を交換し、それによって未だ明らかではない問題や目標、新たな可能性を発見しようとするには極めて不適当な形である。

これに対して、「ネットワーク」はポイントとポイントの接続、つまり「個」相互の自由な関係づくりができる形である。そして、この関係の持つ創造性をさらに拡大していこうとしているのが「ネットワークのネットワーク」たるインターネットに他ならない。ネットワークという形が本来持つ「関係構築の機会」を地球的規模にまで拡大して、さまざまな情報資源へのアクセスや表現の多様化を推進している。つまりインターネットとは、「個」の時間と空間をより拡大していく“きっかけ”として捉えることができる。

私たちの社会は、すでに新しい原理のもとに動き始めている。「デジタル化」は、機器の中身や機能の変更に過ぎないと見えるかも知れない。しかし、今やメディアはヒトの表現や関係のあり方に大きく介在しつつある。特にメディアの

デジタル化は、アナログ的世界観に立っている私たちの行動規範に大きな影響を与え、変革を促すはずだ。気づかぬうちに確実に、社会全体がデジタルパラダイムのもとに再構成されていくだろう。そうした時代に私たちは生きている。

すると私たちは、えてして「どんな世界になるんだろう？」と考えてしまう。しかし、新しい世界の設計図は誰からか与えられるものではないはずだ。これまでヒトは、時代時代に手にした道具を活かし、それによって豊かな生活を送れるよう社会の枠組みを再編してきた。そして、その“とりあえずの結果”が現在の世の中なのだ。私たちの社会を形づくるさまざまな仕組み・制度は、みんながそれぞれの時代の中で模索し、形づくっていくものなのだ。

デジタル環境をどう使い、いかに可能性を広げていくかは、技術の側から投げかけられた課題である。私たちはあらゆるチャンネルを通じて、技術の側にフィードバックを投げ返さなければならぬ。インターネットは、さまざまな個の行動を通して、そうした模索が継続的に行われる、地球規模の実験の「場」として位置づけることができる。

インターネットをめぐる議論の中で、「それは第二の電話になるか？」という設問をしばしば耳にする。確かにその形は電話網に似ている。しかし、だからといってそうした問いを發するべきだろうか？ それより、「インターネットを第二の電話にしていくのは私たちが」という自覚をこそ持ちたいものである。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp